

独占欲全開の幼馴染は、  
エリート御曹司。

*Sakurako & Shinobu*

---

神城 葵

*Aoi Kamisiro*

termity



エタニティ文庫

## 目次

独占欲全開の幼馴染は、  
エリート御曹司。

5

書き下ろし番外編

鷹条夫婦は今日も平和

337

独占欲全開の幼馴染は、エリート御曹司。

## プロローグ

「文房具……ボールペンの在庫は十一箱、と」  
 棚に入った箱を数えた私は、手元の帳面に「十一」と書く。そうしながら、帳面に記載されている計算在庫と数が一致していることを確認した。  
 よし、合ってる。

「次は、えーと……コピー用紙ね」

とある会社の庶務課に勤務してもうすぐ三年目の私・七瀬桜子は、現在、年度末の備品在庫を確認している。といっても、数えるのは未開封、未使用の物だけでいいので、作業自体はわりと楽である。この調子なら、お昼前には終わりそうだ。

「まずは、A4サイズ……」

私は、備品倉庫を兼ねた庶務課の書庫をざっと見回す。しかし、この間まであった場所にコピー用紙が見つからない。

それなりに広い書庫の中は、雑多な物で溢れている。

これは、一度整理した方がいいかもしれない。

そんなことを考えているうちに、コピー用紙の入った箱を見つけた。

「えっと、A4サイズは五梱包入りの箱が二箱と、開封した箱の中に……」

私は棚から開いた箱を取り出し、カーペットの上で中身を確認し始める。

その時、誰かが書庫に入ってきたのに気がついた。男性の足音が近づいてくる気配に、知らず体が震える。ここは人気のない密室である。それが一層、私の恐怖を煽った。

「さくらー？ どーこー？」

直後——艶やかなバリトンボイスに名前を呼ばれて、私はほっと息をついた。

同時に、眉間に皺が寄る。

「さくら？ ……ああ、見つけた」

私を見つけて、嬉しそうに微笑んだのは、鷹条忍。百八十三センチの長身で、非常に整った顔立ちをした美形である。年齢は私と同じ二十四歳。

「備品の在庫チェックだね、俺も手伝うよ」

そう言って傍まで歩いてきた彼に、私は硬い声で返事をする。

「一人でできます。専務にお手伝いいただくほどのことではありません」

——そう。彼は私の勤める鷹条商事の専務取締役なのだ。当然、こんなところで備品確認などやっていい人ではない。

何とかお引き取り願おうとする私に構わず、彼は「どこまで進んでる？」と、綺麗な顔を寄せて、帳面を覗き込んだ。

「一人でやるより、二人でやった方が速くて正確だよ。それに、さくらが棚の上を確認するのは大変だよね？」

「脚立があるので大丈夫です」

「さくらにそんな危ないこと、させられない」

鷹条専務が真面目な顔で断言してくるので、私の眉間の皺は更に深くなった。

「専務、本当に困ります」

「さくら、その他人行儀な呼び方をやめて、忍って呼んで。ああ、昔みたいに、しーちゃんでもいいよ？」

他人である。少なくとも、一般社員が専務を呼ぶ言葉ではない。

「……私、仕事とプライベートは分けたいんです」

「じゃあ専務命令。忍って呼ぶように」

できるだけ淡々と返していた私ににこっと笑いかけながら、公私混同甚だしい命令が下される。彼のペースにつられてはいけなと思うのに、あまりの理不尽さについて苛立ちが漏れてしまった。

「……して」

「え？」

「もう、いい加減にして！ 毎日毎日、どうして私に構うのよ！」

そんな私の逆ギレに、忍は嬉しそうに笑み崩れた。それでも美形なのが悔しい。

「だってさくらは俺の初恋の人だもん。今も初恋継続中の俺にとって、さくらに構うのは当たり前のことだよ」

そう言っ忍は、「さくらは特別なんだ」と、甘く微笑んだ。そして私は——忍のこの笑みに弱い。

私と忍は、はとこ同士である。私の父方の祖母は鷹条家のお嬢様で、正確には現当主の姉にあたる。そして忍はその鷹条グループ総帥・鷹条圭一郎氏直系の孫だ。

忍との関係は、少しややこしい。遠縁といえはそれまでだが、私達の曾祖父が決めた婚約者——でもある。四歳の時に、互いの意思確認より先に決められた婚約だけだ。

それを律儀に受け入れた忍は、以来「さくらは俺の特別」「初恋」と言ってくるようになった。

そして、社会人となった今も、毎日庶務課にやって来ては男性陣を牽制している。被害が庶務課で止まっているのは、会社中にそんなことを主張したら私は退職する、と言ったからだ。

黙っていると、忍は沈黙は承諾と受け取ったようだ。「じゃあ、俺が数を確認するか

ら、さくらは帳面に記入していった」と棚の在庫を教え出した。

確かに、二人でやる方が速い。速いけど……

庶務課の一社員が、専務に仕事を手伝ってもらうなんておかしい。なのに、なんだかんだで、いつも忍に押し切られてしまう。

結局私は、忍と一緒に備品在庫確認を終わらせた。

「終わったー。他に、何か手伝うことある？」

「ないよ。庶務課に戻る」

「じゃあ俺も行く」

私と忍は、並んで書庫を出た。

「忍、並ぶのはやめて」

「えー」

毎日忍が入り浸<sup>びた</sup>っているせいで、庶務課には私達は親戚だと知られているけれど、他の部署の人間は何も知らないのだ。忍と一緒にのそこを見られたくない。

「さくらは俺に冷たい」

でもそこも可愛いんだけど、という忍の言葉を無視した。

すると、後ろから腕を掴<sup>つか</sup>まれ抱き締められる。

「ちょっと、忍、離して」

「嫌だ。離さない」

忍は、更に強く私を抱き締めてきた。

どくどくと、心臓が痛いくらいに騒いでいる。

「忍、ね、誰か来たら誤解される。だから、離して」

「誤解じゃない。俺がさくらを好きなのは事実だ」

私を抱き締めていた忍の腕の力が少し緩<sup>ゆる</sup>んだので、おずおずと振り返った。そこで——私を見つめる忍の表情は、見たことがないくらい真摯<sup>まじ</sup>で息を呑んだ。

「さくらだって、俺のこと——」

綺麗すぎる忍の顔が、吐息を感じるくらい近づいてくる。

——怖い。

何かを期待してしまいそうな私自身が。

微かに震える私に気づいた忍は、ふっと観念したように笑った。おどけた顔で、頭をポンポンと撫でる。

「さくらは、俺のこと好きだよね？」

「……私は、忍とは違うから」

「どこが？」

「……………」

口をつぐみ、忍の視線を避けるみたいに俯いた。

私が忍を好きだなんて、どう考えても「身の程知らず」だ。

平々凡々で地味な容姿。取り立てて優れたところがなく要領も悪い、三拍子どころか四拍子も揃った私なんか、高学歴で容姿も完璧、スポーツ万能な上、権力財力家柄まで揃っている、完全無欠な忍を「好き」だなんて。

私には、彼への気持ちを堂々と口に出すことができない。

「ほんと……、さくらは怖がりだね」

忍が私を見て微笑んだ。仕方ないと言いたそうな口調なのに、とても優しく響く。

「……」

彼の腕から解放されたことにほっとしつつ、寂しさを覚える私は矛盾している。

忍の背が見えなくなるまで見送ってから、私は気持ちを切り替えて庶務課に向かった。

## 1

誰もが知る世界的な巨大グループ。私の勤務する鷹条商事は、世界に名高い鷹条グループの中心を担う大企業だ。

その鷹条グループが傘下に持つ企業は、中核となる会社に勤める私も把握しきれないほどだ。

遡れば、千二百年以上の歴史を持ち公家華族でもあった鷹条家が、明治時代に立ち上げた企業がもととなっているらしい。非上場の同族会社でありながら、これまでグループとして赤字を出したことがないという優良企業なのである。

「戻りましたー」

私は、明るい声を心掛けて庶務課のドアを開けた。男性八人、女性三人の十一人しかいない小さな課なのに、さすがは超一流企業。広々とした、居心地のいい綺麗なオフィスである。

「森さん。備品の在庫確認、終わりました」

私は席に戻る前に、先輩である、森玲奈さんに報告した。玲奈さんは、関西支社から異動してきた、二十六歳のゆるふわ系美人である。

「お疲れ、七瀬ちゃん。戻ったところ悪いけど、急ぎの仕事がなかったら、ちよっと手伝ってくれへん？」

彼女は、私に向かって両手を合わせてきた。私は庶務課に在籍しているけれど、メイシンの業務は社史の編纂だ。その業務の間に、こうして玲奈さん達に頼まれた仕事もこなしている。

「はい。なんでしょう」

「見て、これ。明日までに整理してくれやて」

玲奈さんが見せてくれた伝票入れには、納品伝票、発注伝票、振替伝票、更には受領書控など、サイズの揃ってない伝票が混在し山を作っている。

「うわあ……ぐちゃぐちゃですわね」

「課長が溜めまくってはったんよ……うち、残業は嫌やのに……！」

ざらりと睨みつけられた砂川課長は、びくっと震えてこちらに背中を向けた。

「大丈夫です、二人でやったらすぐ終わりますよ」

「七瀬ちゃん……！」

玲奈さんからうるうるした目を向けられるが、業務を手伝うのは当然のことだと思うちなみに、庶務課の合言葉は「遅れず焦らず残業せず」である。基本的に定時で帰ることを目標とした職場なので、このような急ぎの仕事はレアケースだ。

私と玲奈さんが伝票を整理し始めたところで、他部署に出かけていた佐原葉子さんが戻ってきた。佐原さんは三十五歳で、庶務課の三人いる女性社員の中では一番先輩だ。

「どうしたの、これ？」

「課長が溜めとった」

玲奈さんが端的に答えると、葉子さんは冷ややかな視線を砂川課長に向ける。

「課長。伝票類は溜めないでくださいと、私、お願いしましたよね？」

葉子さんの美しすぎる微笑みに、砂川課長がたじろいだ様子で言い訳した。

「う、うっかりして……」

「うっかりもすっかりありません。——七瀬さん、それを取引先別に分けて。森さんは、こつちを用途別に分けて。お昼は無理でも、三時までには済ませちゃいませよ」

私達にときばきと指示を出しながら、葉子さんが仕分け作業に加わってくれる。

「用途別って、どこまでやったらええん？」

「とりあえず、雑費かそれ以外かでいいわ。あとは、課長に確認してもらうから」

つまり、わからないものは砂川課長に突き返すということだ。

葉子さんは強い。なんせ、元は社長秘書を務めていた人だ。噂によれば、社長に勧められたお見合いを蹴ったことで、「社長の顔を潰しましたので」と、自ら異動願を出して庶務課に来たという。

そんな彼女は、秘書課をはじめ人事や総務など、社内のあるところと情報源ともいべき知己がいて、実は庶務課最強の存在だったりする。

「他に、伝票や書類を溜めている人はいませんか？」

砂川課長以外の庶務課の男性社員が、びしっと背筋を伸ばして頷いた。

「ま、この伝票、自分らが溜めとったもんかもしれへんしな」



ほそつと呟いた玲奈さんの言葉に、私は苦笑してしまふ。

このあと、お昼の休憩を取ったのだが仕事が詰まっていることもあり、私達は十分ほど早く戻って作業を再開した。お互い苦勞性よねえと、葉子さんが溜息まじりに笑っている。

「こちらの仕分け、終わりました。そっちの山の分類も始めていいですか？」

「いえ、七瀬さんは一番タイピングが速いから、入力をお願い」

葉子さんの指示に従い、私は仕分けを済ませた伝票を持ってパソコンに向かう。

「私達はその間に、残りの山を片づけちゃうわ」

「了解しました」

私が入力している間に、二人は正確かつ迅速に伝票の仕分けを進めていった。

「……よし、終わり！」

「七瀬さん、これもお願いね」

「はい」

追加で受け取った伝票は二百枚もなかったため、私はすぐに入力を終えた。

ミスがないかを再度確認して、葉子さんに最終チェックをお願いする。その間に、伝票入れの中に取り残しがないか見た。

その時、社内にて三時の休憩を告げるベルが鳴った。

「あ。三時やん。休憩休憩！」

さっと立ち上がって、玲奈さんが給湯スペースに向かう。

鷹条商事はお昼休憩とは別に、毎日午後三時に二十分の休憩時間があるのだ。世界に名だたるだけあって、超のつくホワイト企業である。

「七瀬ちゃんも紅茶でかまへん？ ミルクやな？」

一瞬の差で出遅れた私は、急いで給湯室に向かう。

「あの、森さん、私が淹れます」

「ええよ、ついでやし。葉子さんはー？ 三人分やったら、葉っぱ使うから」

「じゃあ、私も紅茶をお願い。ミルクでね」

——今日も、玲奈さんに先を越されちゃった。認めたくないけど、私はちょっとトロいのかもしれない。

ここで一番後輩なのに、と席に戻りながら軽く落ち込む。

そこでふと、三時の休憩用にお菓子を持ってきたのを思い出した。私はデスクの引き出しから焼き菓子の詰め合わせを取り出して、葉子さんに渡す。

「佐原さん、よかったらどうぞ」

「あら、ル・フローサのお菓子ね。私、ここのマドレーヌが好きなのよ」

「森さんはいかがですか？」

「食べるー！ 葉子さんのお墨付きなら間違いないもん。待つて待つて、お茶っ葉蒸しとるから、もうちよっと待つてー」

しばらくして、玲奈さんはカップに入った紅茶と、低温殺菌牛乳を入れたミルクピッチャーを持って来てくれた。コーヒーフレッシュでミルクテイーって許せへんねん、と、というのが玲奈さんの主張である。

「わー、可愛い。うちはクッキーいただこうかな」

二人が相好を崩してそれぞれに焼き菓子を取る。私もだけれど、葉子さんと玲奈さんも、甘い物が好きだ。

二人が好きなお菓子を選んだあと、私は菓子箱を手に立ち上がった。砂川課長達、庶務課の男性陣にもおすそ分けした方がいいだろう。

「あの、よろしければどうぞ、砂川課長……」

「やめたれ」

「やめてあげなさい」

間髪を容れず、玲奈さんと葉子さんから止められた。

「七瀬さん。課長はマイホームを購入して、定年まで三十五年ローンを組んでるのよ。降格や左遷になったら困るでしょ」

「皆におすそ分けしようとする気持ちは、大事やけどな。七瀬ちゃんに関しては、何も

せんといてあげるのが課長達への優しさやで」

二人にこんこんと諭される。彼女達がそんなことを言う理由が思い当たるだけに、私は頷くしかない。

その時、庶務課のドアがノックもなしに開いた。

「お疲れ様です」

明るく挨拶しながら入ってきたのは、忍だった。そのまま、真っ直ぐこちらに歩いてきて、すっと私の左隣に座る。そして、ぐるりと庶務課を見回した。

「葉子さん、今日の『さくらに話しかけたり近づいたりした男』のカウントは？」

庶務課には、砂川課長を含めた八人の男性社員がいる。こちらに決して視線を向けない彼らが、忍の言葉に緊張しているのが伝わってきた。

「ゼロです」

葉子さんが、慣れた様子で質問に答える。

「よかった。ほんと毎日気が気じゃないんだよね。いつそここに、監視カメラを設置したいくらいだよ」

「専務、監視や盗聴はやめてくださいね」

「同意を得て設置するなら、問題ないんじゃない？」

目の前で何気なく交わされる二人の会話。その内容は、実にとんでもない。

監視や盗聴されながら仕事をするなんてお断りだ。ただでさえ、どこに行くにも社員カードが必要な上、指の静脈認証まであるくらいセキュリティが厳しい会社なのにな。

「でも、七瀬ちゃんは嫌やろうな」

「嫌です」

玲奈さんの言葉に、すかさず私は同意した。心から同意した。でないと、本当に設置されかねない。

「そっか、なら仕方ないね、諦める。…葉子さん、これ、フレッシュジュースにしてくれるかな」

肩をすくめた忍が、葉子さんに小さな袋を手渡す。

「あら、おいしそうな苺いちごですね。お砂糖あつたかしら」

そう言いながら、葉子さんが席を立ち給湯スペースに向かう。給湯室には、誰が持ち込んだのかミキサーが置いてあった。ただ、型が古くて使いにくいとか、使い手を選ぶとか——葉子さんにしか従わないという意志を感じさせるような代物で、私も玲奈さんも使えないのだ。

「葉子さんお手製の苺いちごのフレッシュジュースがくるから、さくらの紅茶は俺がもらうね」

そう言って、忍が私のカップを手を取った。その動きを事前に防げない私は、やはり

トロい気がする。

「それ、私の飲みかけ…」

「さくらの飲みかけなら俺は気にしない」

綺麗すぎるほど綺麗な顔で笑ってスルーして、忍は私のカップに口をつけた。その一連の所作に、つい目を奪われてしまう。

「はー、さくらとの間接キスにときめく」

「何言ってるの!？」

「二十四にもなつて、キスもしたらんの、専務」

「さくらは、身持ちがしっかりした女性だから」

「頑かたなだけで可愛いんだーと蕩とろけた顔をした忍に、玲奈さんがすつとクッキーを差し出した。

「気の毒やからこれあげるわ。七瀬ちゃんからの差し入れやで」

「ありがとう、玲奈ちゃん。さくらのおすすめのお菓子つただけで俺は嬉しい。玲奈ちゃんのポーチナス査定上げとくね」

玲奈さんと専務の、公私混同まじり甚はなだしい会話でハッと我に返る。

「何の会話ですか！ 新しく淹ひれ直してきますからカップ返してください！」

「七瀬ちゃん、うちが葉っぱから丁寧ていねいに淹ひれたげた紅茶、無駄にする気やないな？」

そう言われると、「淹ひたれていたただいた後輩」としては何も言えない。「口つけちゃったけど、さくらが飲むなら返すよ?」返されても困る。

「……………」

沈黙した私のデスクに、給湯スペースから戻って来た葉子さんがフレッシュジュースを置いた。

「はい、七瀬さん、どうぞ。母ははのフレッシュジュース」

目の前の大振りのグラスから、甘く爽さわやかな香りが漂たよってくる。綺麗な赤と、牛乳を入れてくれたのか、可愛いピンクのグラデーションが目めに麗うつくしい。更に、小粒な母ははを飾かつてある。これもうお店で出せるレベルだと思っ

「すみません、佐原さん。ありがとうございます」

私は立ち上がって、葉子さんに頭を下げる。三時の休憩は二十分しかないのに、葉子さんに仕事をさせてしまった。あとでちゃんとお礼をしなきゃ。

「気にしないで。あのミキサー、使うのにコツがあるし。初めて作ったから、甘さが足りないかもしれないけど」

「大丈夫だよ、葉子さん。その分、俺が甘やかすから」  
にこっと言った忍しのに、玲奈さんが鼻で嗤わらった。

「甘えてもらえへんくせにー」

もっと言いってやってください。

「玲奈ちゃん、キツイ。事実だけにキツイ」

「まあ、七瀬ちゃんは公私混同くわしこんどうでさん真面目まじめさんやからな」

ミルクティーとクッキーを堪能たんのうしながら、玲奈さんが言い、忍しのはうんうんと頷うないている。

「そうなんだよ、そこがまた可愛いんだ。さくらなら、公私混同しても可愛いけどね」  
忍しのはほぼ毎日庶務課しよむくに入り浸ひたっているから、今ではもう葉子さんも玲奈さんも気にしない。というか、この二人は最初から気にしていなかった。

「ね、さくら、おいしい?」

そう言いって、忍しのが私の顔を覗のぞき込んでくる。

母ははの甘さと酸味が絶妙てつめうで、とても濃厚なうでおいしかった。だけど、素直すじに返事はしたくない。

「黙もくってるってことは、おいしいんだね。だったら、お礼。俺にお礼」

こういう勘かんのいいところが、付き合あいの長い相手は面倒めんどうなのだ。私はこちらに身を乗り出でしている忍しのから顔を背そむけて、葉子さんに笑わらみを向ける。

「佐原さん、ありがとうございます。すごくおいしいです」

「それはよかった。でも、スポンサーにもお礼を言ってあげてね、鬱陶しいから」  
 につこり笑って言われたら、私もこれ以上はスルーできない。仕方なく、隣を見ずに  
 棒読みでお礼を言った。

「ありがとうございます、鷹条専務」

「さくらー、さっき俺のことは忍って呼ぶように言ったよね。理由が必要なら何回でも  
 言うよ、俺はさくらが初恋で、今も……」

「わかった、もういい、黙って」

私は、忍の顔を真っ直ぐに見た。

「でも、私、忍の『初恋』は信じない」

「しっかし、専務は相変わらず桜ちゃんのこと大好きやな」

その日の終業後。更衣室で着替えていた私に、玲奈さんが話しかけてきた。会社は  
 ちょうど繁忙期で、定時で仕事を上げられるのは庶務課くらいのものだ。その為、現在更  
 衣室の中に、他の部署の女性はいない。

「桜子ちゃんが可愛くて仕方ないのよ」

そう言うのは葉子さん。二人は仕事が終わらないところでは私のことを名前で呼んでく  
 れている。だから、私もまた二人を名前で呼ぶようにしていた。

「入社早々、庶務課に来たかと思うたら『男性社員はさくらに近づくな』やもんなあ」  
 「……思い出させないでください……」

——そう。あれは一年前の春。

鷹条グループの総帥を祖父に持つ忍は、最初から専務取締役として入社した。何故な  
 ら彼は、その為の教育を子供の頃から受けてきたからだ。

中学で英国に留学しそのままハイスクールまで卒業した忍は、アメリカの名門私立大  
 学をスキップで卒業後、フランスのグランゼコールに入ったという、ものすごい経歴の  
 持ち主なのだ。

そんな忍が、去年の入社式の直後、いきなり庶務課に現れた。驚き慌てる社員達に構  
 わず、彼は勝手に私のデスクの隣に自分の席を作り、「男性社員は七瀬桜子と会話も社  
 内メールも電話もすべて禁止する。どうしても必要な場合は、他の女性社員を介して伝  
 えるように」と高らかに宣言したのだ。

葉子さんが取り成してくれたおかげで挨拶だけは許されたが、私はその日以来、庶務  
 課の男性社員達に心理的にも物理的にも距離を置かれている。

——忍には何の権利があつて、私をこんな目に遭わせるのか。私は忍の所有物か、と  
 言いたい。

「毎日、庶務課に入り浸<sup>びた</sup>って、いつ仕事しとるんやろ専務」

「仕事はきちんとしてらっしゃるわよ。今は、緑の砂漠化対策のプロジェクトで、研究開発を進めてるみたいね」

着替えを済ませた葉子さんが教えてくれた。

「ああ、それと、桜子ちゃん」

「はい」

「経理から、桜子ちゃんが欲しいって言われたんだけど、お断りしたから」

「え？」

「桜子ちゃん、伝票の入力が速くて正確でしょ。どこかでそれを聞きつけた経理の課長がぜひ欲しいって言ってきたんだけど」

経理課には、結構……気の強い女性が揃っていることで有名なので、思わず腰が引けてしまう。

「相談もせずに悪いとは思ったけど、桜子ちゃんはそのうちの大事な戦力だから出させませんってお断りしたの。専務のこともあるし。よかったかしら？」

「はい。あの、ありがとうございます」

「よっぽど桜子ちゃんが欲しかったのか、もうすぐ三年目なんだから異動は当然とか言ってきたね。私が十年以上異動していないのを承知で、喧嘩売ってるのかしら……」

うふふと無表情に笑っている葉子さんが怖い。その逆鱗さかきりに触れたであろう経理の課長

に同情しつつ、当面はまだ庶務課にいられることに安堵した。と同時に、自分の能力を思わぬ形で評価されたことが嬉しくて、恥ずかしくて、くすぐったくて、笑った。

評価してもらえたことは嬉しいけれど、庶務課からは離れたくない。そんな我儘わがままな私の頭を、玲奈さんが優しく撫でてくれる。たぶん、私の我儘わがままな気持ちもわかった上で。

「あげへんもんね、桜ちゃんは戦力であると共に、うちと葉子さんの癒しいやすやから」

そう言って、私の心の負担を軽くしてくれる。

「それに、そんなことしたら専務がキレるわね。経理は男性社員の出入りも多いし」

「うん、専務はほんまに桜ちゃんが絡からむと人間変わるよな。で、仕事の合間を縫ぬって桜ちゃんに会いに来とるわけか。……逆さかやな、桜ちゃんに会う隙間を縫ぬって働いとるよな、あの人。ほんま愛されとるなあ」

「……忍のあれは、思い込みですから」

——そう。忍の「初恋」はただの思い込みだ。ある人にそう誘導された、作られた初恋。

だから私は、忍の言う「初恋」も「好き」も、信じない。

——忍が周囲に声高に主張する「初恋」とは、作られたものである。

私の、父方の祖母である七瀬桃子は、鷹条本家のお嬢様だった。平々凡々とした私が鷹条商事に入社できたのも、そのおかげだ。

そもそも、幼かった私と忍が会うことになったのは、祖母とその弟・圭一郎のある企みによってだった。

当時忍は、曾祖父である煉のもとで暮らしていたらしい。曾祖父は初めての曾孫である忍を溺愛しており、決して手元から離さなかったそうだ。それというのも、忍が早速した曾祖母によく似ていたからだという。

そうして、生まれる時代を千年ほど間違えた趣味人の曾祖父に溺愛されながら、忍は武蔵野にある広大な屋敷で育てられていた。

しかし忍は、本家の跡取りとして幼少期から様々な教育を受けなくてはいけない身。圭一郎おじさま達が何度返すよう言っても、「年寄りのたつたひとつの生き甲斐を」と

泣かれては、無理に忍を奪い取ることもできなかったようだ。

だが忍が四歳になる頃、圭一郎おじさまから、ついに私の祖母に救援要請が入った。このまま曾祖父のもとで育てられては、忍が曾祖父同様の、「風流人」「趣味人」——といえは聞こえはいいが、偏屈で人嫌いな性格になってしまいかねない、と。

姉弟二人が話し合った結果、忍を無理に取り上げるのではなく、忍の意思で外に出たいと言わせれば問題ないのではという結論に達したそうだ。

そうして忍と同年だった私は、祖母に連れられて、初めて武蔵野の屋敷を訪ねた。同じ年齢の子供と仲良くなれば、忍も自発的に外へ出たがるのではないかと考えたのである。

しかし、事態は思わぬ方向に転がった。

「はじめまして、ひいおじいちゃま」

祖母に教えられたとおりに挨拶した瞬間、曾祖父の表情が固まった。まるで信じられないと言いたげに私を見つめたあと、片時も手元から離さなかったもう一人の曾孫、忍を抱き寄せて——

「忍。この子が、おまえのお嫁さんになる子だよ」

そう、言ったのである。

その頃の忍にとって、曾祖父は絶対的な庇護者であり、無条件に愛情を注いでくれる

人だった。忍は素直に、「大好きなひいおじいさま」の言葉に頷いた。

「お父様。いくら何でも急すぎでは……」

「桃子、これは決定だ。圭一郎にもすぐに知らせよう。……桜子、この子は忍だ。おまえ達は、はとこになるのだよ」

「はと、こ……?」

曾祖父が祖母に勢い込んで話しているが、私にはよくわからなかった。そんな私に、忍はにっこり笑いながら説明してくれる。

「ぼくのおじいさまと、さくらちゃんのおばあさまが、きょうだいなの」

「そうなの?」

幼い私達のやり取りを聞いて、曾祖父は感涙かんだいしていた。

「董子の声を、また聞けるとは……っ」

そんな曾祖父の様子に、祖母は戸惑った表情だった。

「お母様の声、ですか?」

「桜子の声は、董子によく似ている」

「お父様。桜子はまだ四歳にもなっていないませんが」

幼児の声を、妻と同じ声質だと聞き分けられる繊細せんさいさ。趣味と風雅の世界に生きてきただけあって、曾祖父はそういう感覚がずば抜けていた。

「忍は、董子によく似ている。桜子が忍の子供を産んでくれれば、もう一度董子に会えるのだよ、桃子」

二十代で亡くなったという曾祖母を、曾祖父は今も変わらず愛し続けていた。それこそ、妄執もうあつに近くらいに。

「わかったね、忍。ひいおじいさまのお願いだ、聞いてくれるかな?」

「はい、ひいおじいさま」

そして、私の意思をすっかり無視して、忍は絶対的存在である曾祖父に固く誓った。

「ぼく、さくらちゃんとけっこんします」

——これが、忍の言う「初恋」の真実だ。

子供の頃ならともかく、今の流れで「さくらは俺の初恋だもん」や「さくらは特別なんだよ」と言われて、誰が納得するだろう。誰が信じる?

忍の言う初恋は作られたものであり、曾祖父にお願いされた「特別」だ。

しかも目的は私ではなく、私の産む娘。

私は、曾祖父の「董子にもう一度会いたい」という願いを叶える為だけに結婚したくはない。

忍だって同じだろうに、彼は曾祖父に溺愛されて育った為か、その願いを叶えること



に何の疑問も感じていないのだ。

更に、圭一郎おじさまにとつても、忍の意識を「外」に向けるには、曾祖父の申し出は好都合だった。その為、曾祖父の意を汲んだ祖母と圭一郎おじさまにより、私達は頻繁に引き合わされるようになった。忍は私に異常に懐くようになったし、事情を呑み込めないながらも、武蔵野に住む綺麗なはとは、私の一番近しい遊び相手となった。

そして、一年が過ぎる頃。

「さくらちゃん。おおきくなったら、ぼくのおよめさんになってくれる?」

武蔵野の、曾祖母が愛していた薔薇園で、忍は私にそう言った。

「しーちゃん?」

「うん」

「やだ。さくらはおよめさんになるのはいや」

「え、どうして?」

断られるとは思っていなかったのか、忍は不思議そうに首を傾げた。その愛らしさに負けた私は理由を説明した。

「およめさんはね、かわいい子しかなつちやいけないの」

——当時私が通っていた幼稚園では、おままごとの際の配役決めにはものすごく厳しいルールがあった。決められた可愛い子以外が「およめさん」役をやるものなら、即

座にハブられ身の程を思い知らされるのだ。

忍から求婚された日の前日、私はその現場を目撃してしまった。

わりと可愛いミホちゃんが、とても可愛いルミちゃん達に「どうして勝手におよめさんになったの」と厳しく責められていたのだ。

自分はそれほど可愛くない、と幼いながらも自覚していた私は、忍の「およめさんになって」という言葉を反射的に断っていた。

すると忍は、にっこりと天使の笑みを浮かべながら馬鹿の極みを口にした。

「それなら、ぼくがさくらちゃんのおよめさんになるよ。ぼく、かわいいからだいじょうぶだよね?」

「うん。しーちゃんは、ルミちゃん達よりかわいいから、いいよ」

「じゃあ、やくそくだよ。さくらちゃん、ぼくとけっこんしてね」

「わかった」

自分の外見が、超がつくほど可愛らしいことを自覚していた忍の作戦勝ちか。それとも、深く考えずに返事をしてしまった当時の私が、忍を上回る馬鹿だったのか。

——以来、忍は「口約束だけど婚約した、誓いのキスもした」と言つて憚らないのである。

ちなみに、この時のキスは、額に唇を当てただけの、子供騙しである。決して誓い

のキスなんてご大層なものではないと、私の名誉の為にはつきり言っておく。二人の関係がそんな風に作られたものであると言いつ張つていながら、何故、私は今も忍の傍にいるのか――

簡単なことだ。私も忍のことが好きだからである。

いつもの月曜日の午後。玲奈さんが私のデスクまで来て頭を下げた。

「七瀬ちゃん、ごめん！ これ、総務課に出して来てくれへん？」

そう言つて、クリアファイルに入った書類を差し出す。

「総務課ですか？」

「ほんとごめん、別件で、手がいっぱいになつてもうてん」

葉子さんは、電話の取り次ぎと来客対応がある為、午後は庶務課から離れられないそうだ。

「わかりました。すぐに行つてきます。他に行くところはありますか？」

私の担当する社史編纂は、特に期限があるわけではない。玲奈さん達の役に立つなら手伝いたい。

「あー……できたら、第三営業部と秘書課もお願いしたいかな……」

「はい。砂川課長にも、御用件がないか伺いした方がいいでしょうか？」

「……それはやめといたり……監視カメラはのうても、専務が察知しそうや」

玲奈さんの言葉を否定できない自分がいた。

「それじゃ、行つてきます」

「ごめんな。氣いつけてな」

「男性社員に声かけられても無視するのよ、七瀬さん。フォローは私がするから」

挨拶以上はしなくていいと二人に念を押され、私は庶務課を出てエレベーターホールに向かう。

幸い、やつて来たエレベーターの中に、男性社員は乗っていないかった。

ほっとしながら乗り込むと、先客の綺麗な巻き髪の女性が私を一瞥し、すつと眉をひそめた。

……だからエレベーターに乗るのは嫌なのよね。低層階の庶務課はエレベーターを使うな、と態度で表してくる人がいるし。とはいえ、二階の庶務課から、各部署まで、十五階以上も階段を上っていく体力なんてない。

やがてエレベーターは総務課のある十五階に着いた。エレベーターを降りる時、小さく女性に会釈してみたけれど、速攻でドアを閉められてしまう。

総務課と第三営業部には、玲奈さんが事前に連絡してくれたみたいで、すぐに女性社員が出てきて受領書を渡してくれた。やっぱり、こうしてきちんと受け取ってもらえた

方が安心する。社内書類ボックスへのポストインだけだと、相手に届くまでにちょっと時間がかかるし。

さて、あとは秘書課だ。

……正直、かなり気が重い。

秘書課は、最上階の役員フロアにある。ここには忍の部屋もあるし、なるべくなら行きたくないと思っていた場所だ。

それに秘書課は——今朝、葉子さんから聞いた「専務に当たって碎けた十八人目の女性社員」がいる部署だ。私から言わせればただの甘ったれだが、忍は対外的には「クールな御曹司」で通っている。確かに、黙っていれば冷たいほど整った美貌ではある。更に鷹条グループの跡取り、華やかな学歴、由緒正しい血筋のセレブ、おまけに姑しんやうは海外暮らし。本人曰く「俺わいってなかなかの好物だと思っう」は伊達だてではない。

よって社内に限らず、我こそはという女性が非常に多い。社外の人より機会の多い社員達は、当たっては碎けている。

葉子さんによると、玉碎した女性は秘書課の中里美春さん、二十五歳。金曜日に忍に告白して、その場でお断りされたらしい。それを私が申し訳なく思う必要はないのだけれど、何となく気が重い。

だけど、頼まれた書類はきちんと届けなくてはならない。

覚悟を決めた私はエレベーターを降りて、秘書課の受付に向かった。すると、そこに座っていたのはさっきエレベーターで一緒だった巻き髪の女性。彼女は私を見た途端、それまで浮かべていたにこやかな笑みを、瞬時に消した。

「庶務課が、役員フロアに何のご用かしら」

「あの」

「この先は役員の皆様がいらっしゃるの。そんな場所に、庶務課が何のご用？」

「書類を、届けるようにと……」

何とか用件を伝えるけれど、巻き髪の女性——ネームプレートで確認、中里美春さん——は、まるで受け付けてくれない。

「庶務課なんかから受け取るような書類、ここにはないわ。そうよね？」

中里さんは、隣に座っている女性に声をかける。その女性も、中里さんに同調するよるに頷いた。

「そういうことですから、お引き取りください。必要があったら、こちらから呼びますから」

「待ってください、せめて確認をしてもらえませんか」

内容の確認もせずに追い返されて、必要だったらまた持ってこい、なんて。さすがに私も、はいそうですかと領けない。

「そろそろ、お約束のお客様が見える時間なの。——警備員を呼んだ方がいいかしら？」

「……っ」

咄嗟に言い返せなくて、私は俯いた。

私が、もっとしっかりしていたら、こんな風にあしらわれることはなかったのかもしれない。私は自分自身にこれじゃ駄目だと言いつけさせる。社会人になってもうすぐ三年目。簡単なお使いひとつ満足にできないなんて、情けないにも程がある。

何より、ただ、低層階にあるというだけで庶務課を馬鹿にされて引き下がれるかという思いがあった。

「確認をお願いします。庶務課が二階にあることと、この書類の受け取りは関係ありません」

俯いていた顔を上げ、私は真っ直ぐ中里さん達を見てそう言った。虚勢と笑われたって構わない。私は、この書類を届けに来ただけだから。

「……あなた」

完全に見下していた私が逆らったからか、中里さんの眉がつり上がる。私は、震えそうな足を踏ん張るのが精一杯だった。

「中里さん……」

隣の女性が、さすがに見かねて中里さんを宥める。その時。

「……何をやっているんですか？」

背後から、聞き慣れた声が聞いたことのない冷たい口調で響いた。目の前の中里さん達が蒼白になる。

「せん、む……」

「何をやっているのかと聞いたんですが？」

抑揚のない冷淡な声に、中里さんはびくつと震えた。

確かに忍の声なのに、私の知る忍とは明らかに違う。私は、怖くて振り返ることができない。

「きよ、今日は、専務は出張だと……」

「……何度も繰り返さないでほしいな。何をしていると聞いたんだ」  
苛立ちを隠さない声は、命じることには慣れきった尊大さがあつた——なのに、私はその声に魅了される。

「いえ……専務にお気遣いいただくほどのことでは……」

「あるかどうかは俺が決める。——秘書なんかが決めることじゃない」

相手の言葉を厳しく遮ると、靴音を響かせて、専務——忍が私の隣に立った。

「庶務課からですか？」

「……はい」

これがビジネスモードなのか、いつもの甘えた口調ではなく、落ち着いた口調で静かに問いかけてくる忍に……私は少しだけ怯んでしまう。

私の怯えを察したのか、忍は中里さん達に見えない角度で、やわらかく微笑んだ。その表情を見て、強張った体から力が抜ける。思えば私は、ビジネスモードの忍をまったく知らなかったのだと、初めて認識した。

「市川常務宛の報告書と、鷹条専務——俺宛の報告書ですね。確かに」

受け取ったあと、色素の薄い双眸が私を映して笑う。

「……俺は、受領書を持っていないのですが、あなたは持っていますか？」

「あ、は、はい。お待ちください」

私は急いで持参していた受領書を渡して、サインをもらう。

そういうえば、忍にいつも付いている秘書の滝上さんの姿が見えない。今日は別行動なのかしら。

「市川常務には、俺から渡しておきます」

「はい。ありがとうございます」

「専務……!? 何かございましたか!？」

騒ぎを聞きつけたのか、秘書課のオフィスから三十代半ばくらいの、落ち着いた美人が出てきた。中里さんが更に蒼白になったので、上司なのだろう。

「……仕事をしない者を受付に座らせるな」

忍は、低い声でそう言った。

「仕事を、しない……?」

「書類の受け取り拒否の判断を、独断でやるような秘書はいらない」

忍は冷たく言い捨てた。瞬間、オフィスから出てきた美人さんの顔が般若になる。

「教育はあなたに任せる」

「承知いたしました」

美人さんが一礼すると、忍は中里さんをちらりと見遣って——そのまま、奥の役員室に歩いて行く。

ビジネスモードの忍は整いすぎた顔立ちの冷たさが増して、綺麗だけれど、ちょっと怖い。

でも……もしかして……助けに、来てくれたのかな。

真つ青になった中里さん達の前で、般若顔になった美人が仁王立ちしている。

「ごめんなさい。失礼があったみたいで……」

「いえ。こちらこそ、お手数をおかけしました」

私の言葉に美人さんはふわりと微笑んだ。そして、すぐにまた般若になって中里さん達に向き直っていた。……あちらの自業自得とはいえ、居心地の悪くなった私はエレ

ベーターホールに急いだ。

「森さん。総務と営業と秘書課に、書類を届けてきました。これが、受領書です」  
「秘書課もイケた？ 大丈夫やった？」

「はい」

よかったあああと、玲奈さんは大袈裟おおげさなくらい大きな安堵あんぷの声を漏らした。

「秘書課はヤバイと思うてん。あとになって、マズいと気づいたんよ。あそこの社員、キツいのが揃うてるし、うちが行けばよかつたって思うてたら、専務が来たから」

「すごくいいタイミングで来ましたよ……見てたのかと思うくらい」

私がぼそつと言うと、玲奈さんは苦笑しつゝ受領書を確認し始めた。

「やっぱり苛められてたんや。秘書課は、基本的に他部署の女見下みくだしてるからな」

「そうなのよね。困りものだわ。——それで？ 七瀬さん、誰に何を言われたの？」

葉子さんも呆れたように話に乗ってくる。何を言われたっていうか……私がちゃんと対応できなかっただけというか。

「えつと……書類を受け取ってもらえなくて。結局……専務に渡しました」

秘書課でのやり取りを私から聞き出した葉子さんは、困った様子で溜息をついた。

「秘書課の時の後輩から公私混同はんごう甚だしい勘違い娘が部下にいるって聞いてたけど、なるほどね……苦労してそうだわ。鷹条の社員の質が落ちたと思われかねないし」

「ほんまや。七瀬ちゃんが持つてった、専務宛のお宝書類を受け取らんかったなんて。

専務、かなりお怒りやろうなあ」

確かに、怒っていた。忍は私の前ではいつも笑っているから、あんな冷たい顔は見たことがない。そこでふと、玲奈さんの言葉に気になる単語があったと気づく。

「お宝書類……?」

「んー、七瀬ちゃんに頼んだ専務宛の書類なあ、中身は、七瀬ちゃんの写真その他諸々もろもろやねん」

「ええ!？」

玲奈さんはさらりと saying でのけた。ちょっと待って、いつ撮影したの!?

「先週末、ご飯行ったやん？ 専務、七瀬ちゃんとディナーしたかったらしくてな。うちらが先に約束してるって知ったら諦めた——というか『さくらの写真撮って現像して』って言われてん」

——だからあの日、いつになく玲奈さん写真撮ってたのか！ SNSに上げるような人じゃないから、不思議に思ってたんだけど。

「……森さん」

「昇給とボーナス査定に関わるって言われたら、仕方あらへんやん。先立つモノは必要やで、七瀬ちゃん。けどなあ、うち、七瀬ちゃんを庶務課から出してしもうたから……ヤバいな」

うっかりしとったわー、と玲奈さんはデスクで頭を抱えている。

「あの、私は、庶務課から出たらいけないんですか？」

「うん。できるだけ庶務課から出さんように、とは言われとる。男との接触の確率上がってしまうからな。せやのに、うち、七瀬ちゃんにお使い頼んでしもうたわ……」

「代わりに行かなかった私も同罪よ」

葉子さんも苦笑している。だけど私は笑えない。

忍の過保護な独占欲は、仕事に差し障る。ただでさえ、男性社員のお手伝いは何もさせてもらえないのに。今の私は、相手が男性というだけでコピーやお茶汲みすらできないのだ。一番の下っ端が、一番気を使われているなんて、明らかにおかしい。

「……専務には、私からお願いしておきます。すみません」

でも、と私は忘れず玲奈さんに釘を刺した。

「写真とかは、やめてくださいね」

「盗み撮りやないし、かまへんやん」

「森さん」

「この際だから白状するけど、私はこの半年間の七瀬さんと男性社員の接触について報告してるわ。具体的には、庶務課以外で七瀬さんが挨拶した相手とかね」

何でもないことのように葉子さんがぶっちゃけた。

何なの……もしかして私、忍の監視網の中で生きてるの？

呆然として言葉も出ない私に、玲奈さんが不思議そうに聞いてくる。

「七瀬ちゃんは専務の何が不満なの？ あんなに七瀬ちゃんにベタ惚れやのに。独身イケメンのセレブが日本に何人もおると思うたらあかんよ？」

そう言って、玲奈さんは書類をトントンと揃える。だけど、私の答えは、いつもと変わらない。

「忍の初恋は思い込みですから」

「七瀬ちゃんのそれも、思い込みに思えるんやけどなあ……何で七瀬ちゃんは専務に素っ気ないん？ うちは、専務は綺麗すぎて好みからちよっと外れるけど、百人中百人が美形って認める顔やん？ 背も高いし、スタイルも、そこらのメンズモデルよりパラスよろしいし」

忍の顔は確かに極上だ。そして私は平凡を絵に描いて地味で色づけした容姿である。

「……あの顔の隣に並びたくありません」

「うーん、忠告やけどな、七瀬ちゃん」

「はい?」

玲奈さんが、苦笑しながら私を呼んだ。普段の明るいノリではなく、少し真剣な心配そうな口調だった。

「そこそこ相手したらんと、そのうち専務、爆発するで? そしたら、専務が七瀬ちゃんにご執心なこと、あつという間に会社中に広まるからな」

今のところは、庶務課内だけで済んでいる忍の執着が社内に知れ渡る——その結果、どうなるか。

「中里さんみたいに、専務に当たって碎けた女からの逆恨み、ガチでくるで」

女の人の逆恨みはお断りしたい。

「そういう子は何故か自己評価が高いものね。でも、七瀬さんを苛めたりしたら、私がシメるわよ」

「いやいや、その前に専務が殲滅するて、葉子さん」

……忍は、そこまで暴君ではないと思うけど。

当事者である私を無視して交わされる二人の会話に、私は頭が痛くなってくる。ただ、忍ならやりかねないという危惧もあるから、私は敢えて頭を空っぽにして、仕事に没頭した。

翌朝。出社した私は毎日の日課である掃除を始める。

もうすぐ三年目とはいえ、庶務課では下っ端なので、朝は一番に出勤して軽く部屋の掃除をするようにしている。専門の清掃業者が入るとはいえ、基本的にデスクや棚には触らない。だから、放っておくと結構汚れていたりするのだ。

「さくら、おはよう」

「……おはようございます」

ドアを開けて入ってくるなり、私を見つけた忍はにっこり笑った。以前は、パーティションの陰に隠れていても見つかった。忍には、私を見つけたセンサーでも付いているのかしら。

「毎日偉いね、さくら。すごい、可愛い」

「私には、これくらいしかできないもの。それから、可愛くない」

実際、私の仕事である社史編纂は、期限の切られていない仕事だ。だから私としては、手が空いた時は、庶務課のアシスタントとして働きたかったのだけれど——忍のおかげで、それは夢と消えた。

固く絞ったタオルでデスクを拭きながら、何度か給湯スペースと行き来する。バケツを用意してもいいんだけど、蹴倒したら悲惨なものね……

「さくら、今日空いてる? 夕飯、一緒に行こう」



「嫌。職場で、仕事に関係ない話はししないで」

私のつつけんどんな返事にも、忍はまったく動じない。

「始業三十分前だよ。庶務課は早出も残業もないし、まだ誰も来ない。それにさくらは、タイムカード切つてないよね。だから今はプライベートのはずだ」

私が早出するもうひとつの理由は、朝の満員電車を避けたいからだ。一時間早く家を出るだけで、通勤は随分楽になる。そしてその時間を使って、掃除をしている。

「それに、この間、意地悪な秘書から助けてあげたよね、デートは無理でも食事くらいはしてくれてもよくない?」

それを持ち出されると弱い。助けてもらったのは事実だから。

「……」

「都合が悪くなるとすぐ黙るんだから。——ほんと、我儘わがままでも可愛いな、さくらは」

笑みを含んだ声に、体が震える。時々、忍は意地悪な言葉を、艶のある声で私に言う。

「……忍」

「声が震えてる。俺はさくらに何もしないのに、最近は警戒心全開だね——すごく、可愛い」

忍の声と視線に、びくりと震えた。捕食者を前にした時のような怯おびえと、僅わずかな興味が私の中に芽生はえる。このところ、私の知らない忍が、少しだけ顔を出すようになった。

「何もしないよ。だからそんなに怯おびえないでほしいな」

両手を降参の形で上げた忍は、困った様子で首を傾げた。

「ごめん。さくら、逃げないで」

「……逃げて、ない」

自分でもわかるくらい怯おびえた声で答えて、私は逃げるみたいに掃除用具を片づけにいった。忍の見せる執着が、私は時々怖くなる。

「ごめん。俺が悪かった」

つい焦るんだよねと、忍は溜息をついて意味不明な眩くらきを漏もらす。

「……うん」

私は、意識を変えたくて、お花に水をあげに行く。そのあとを、忍が黙ってついてきた。

私は階段で三階に上がり、庶務課に割り当てられている第五会議室に入る。といって、会議室とは名ばかりで、ここで会議があったことは私が知る限り一度もない。

風通しのいい窓際には、胡蝶蘭こちょうらんをメインにいただきものの花が綺麗に飾られていた。

その花にはすべて、送り主が記されている。宛先は営業だったり、開発だったり色々だ。事あるごとくにいただくお花のお手入れは、庶務課の仕事。そして、この鉢植え達は、送り主たる取引先さんがご来社する時だけ、その部署に持って行かれるのである。

「えーと、如雨露は……あった」

「俺も手伝う」

「如雨露はひとつしかないし、忍はもう専務室に戻りなさいよ」

「嫌だ」

一言で拒否された。私は忍に構わず、給湯スペースで如雨露に水を入れ窓際に向かった。忍はいえ、給湯スペースから私を眺めている。そんなことをしているくらいなら、専務室で仕事をしたらいと思っうのに。

その時、突然ノックもなしに会議室の入口が開いた。見ると、スーツを着た三十代ほどの男性社員が立っている。彼は、私を認めた途端、乱暴な口調で問いかけてきた。

「野宮製鉄さんからの胡蝶蘭、どこ？」

「え」

「だから、野宮製鉄さんの胡蝶蘭だよ」

突然大声で言われて、私はびくつと震えた。中学以降はずっと女子校に通っていた私は、男性が苦手だ。特に大声で怒鳴られることが怖い。忍はそれを知っていて、私の前では幼い頃と同じように接してくれていることもわかっていた。

だけど、忍じゃない人には——どうしていいかわからない。そして、忍じゃない男の人は、私の恐怖心なんて気にも留めてくれない。

## 立ち読みサンプル はここまで

「す、少しお待ちください」

私は如雨露を置いて、焦って鉢植えの近くに寄った。毎日水やりをしていますが、配置がころころ変わるので、すぐには答えられない。

「確か、野宮製鉄さんのお花は、ピンク色で……」

「ああ、もういいよ、自分で探すから。ったく、マジで使えないな、庶務課は！」

ピンクの胡蝶蘭は少なかったたので、すぐに見つかったらしい。窓際に置いてあった鉢を抱え、男性社員は私を睨んで会議室を出て行った。

「……あ！」

乱暴に鉢を取られた為か、窓際に置かれた他の胡蝶蘭の茎が大きく揺れている。やがてぐらりと傾き窓際から落ちそうになった。

私は慌てて鉢植えを支えようと駆け出して、自分がバランスを崩してしまふ。

「……きやつ！」

「さくら！」

背後から焦った声が聞こえた。転倒を覚悟して目を閉じた直後、強い力で抱き締められる。そしてすぐに、ガツツと重い音がした。

私は、おそるおそる目を開けて、息を呑んだ。

眼前には、カーペットに散らばった土と欠けた鉢があった。背中にぬくもりを感じて